平成 24 年度 学内研究助成金 研究報告書

近畿大学
課題番号：ＫＪ01

研　究　種　目	□奨励研究助成金	☑研究成果刊行助成金
	□21 世紀研究開発奨励金 （共同研究助成金）	□21 世紀教育開発奨励金 （教育推進研究助成金）
研 究 課 題 名	売上高予想、コスト変動、利益への影響―日本企業の実証分析―	
研究者所属・氏名	研究代表者：近畿大学経営学部会計学科　安酸建二 共同研究者：	

１．研究目的･内容

日本企業に見られるコストの下方硬直性を実証的に明らかにし、コストをめぐる経営意思決定理論の発展と、経営実務における意思決定の改善に貢献する。

２．研究経過及び成果

「日本企業のコスト変動分析
―コストの下方硬直性と利益への影響―」

中央経済社 2012 年 10 月出版

コストに関する研究は，管理会計研究の中心的なテーマである。その歴史を振り返ると，原価概念とその計算技術である原価計算、そして原価管理技法がその中心的な研究テーマであった。

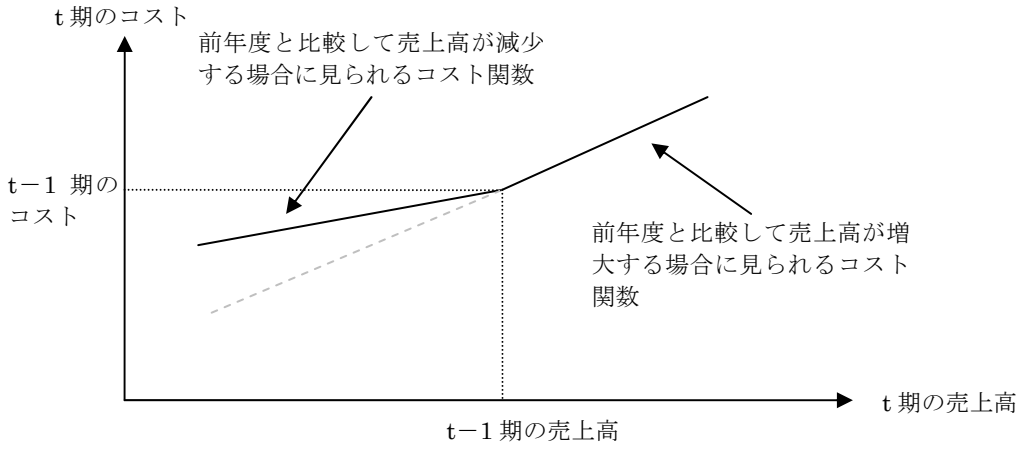
しかし，近年のコンピューター環境の進歩や財務データの入手可能性の向上は、大量のコスト・データを統計的な手法を通じて分析し，コスト変動に見られる何らかの傾向や現象を明らかにすることを可能にしつつある。本書の最大の特徴は、まさにコスト・データの統計分析を通じて、コスト変動を明らかにしようとする試みにある。

本書で注目するコスト変動は，「コストの下方硬直性（cost stickiness）」と呼ばれる現象である。コストの下方硬直性とは，売上高が減少する場合のコストの減少率の絶対値は，売上高が増大する場合のコストの増加率の絶対値よりも小さいという現象を指す。（図を参照されたい。）

本書では、全上場企業の財務データを過去 15 年（約 30,000 企業／年）にわたって入手し、その統計的分析からコストの下方硬直性とその利益への影響を分析している。分析の結果は、コストの下方硬直性が広く観察されると同時に、利益の変動に重大な影響を与えていることを示している。また、経営者が行う将来の売上高予測が、コスト変動に影響を与えていることも明らかになった。特に、売上高予測が楽観的な場合に、コストがより下方硬直的になり、利益がより圧迫されることが判明した。

統計分析を通じて得られるコスト変動に関する発見は、あくまでコスト変動に見られる全般的な傾向であり、個々の企業のデータを一件一件分析してもおそらく得ることができない。経営実践の立場から見れば，本書での発見事項は，個々の企業が独自に自社のコスト分析を行っても得ることができない可能性が高い。それゆえに，多くの企業が，コスト変動をめぐる経営意思決定とその利益への影響に関する全般的傾向に気づかぬまま経営を行っている可能性が高い。ここに経営意思決定を改善する余地があり，そのための情報提供を行うのが本書の研究書としての役割である。

売上高の減少時に見られるコストの下方硬直性のイメージ



3．本研究と関連した今後の研究計画

□　日本会計研究学会第 72 回大会における研究報告：「短期業績と長期業績のトレード・オフ：利益調整が行われないとき」

□　投稿中論文：Management Forecasts of Costs: Do Managers Accurately Estimate Costs?

□　投稿予定論文：Are 'Sticky Costs' the Result of Deliberate Decision of Managers? Available at ssrn http://ssrn.com/abstract=1444746

4．成果の発表等

発　表　機　関　名	種類（著書・雑誌・口頭）	発表年月日(予定を含む)
	著書	中央経済社 2012 年 10 月出版